

本連載を始めるにあたって、障害者家族に关心を寄せるようになつた原点である大学生時代を過ごした広島を訪ねました。当時、障害児学級の教員をめざしていた私は、ときには大学の勉強よりもボランティアとして関わっていた障害児者の余暇活動に熱中していました。そこで出会った同世代の障害者、そしてその家族との出会いは、私の人生を方向づけたまさに運命の出会いともいえるものです。

*

私と同世代の障害のあるメンバーたちは、最初に出会つた頃は、お互に20歳前後でしたが、それからおよそ四半世紀の年を重ねました。私自身は当時想像だにしなかつたことに大学に職を得て、研究を生業とし、家庭をもち、子どもを育てながら、そろそろ年老いてき始めた親のことを気にしながらも、あわただしい毎日を過ごしています。

とても気がかりだつたメンバーで、久しぶりに会うことができた方がいます。学生当時、家族ぐるみで親しくしていたよし子さん（仮名）は、障害者運動の先頭に立つていたお父さんが急逝された後、持病があるお母さんと二人暮らしをしていましたが、それもままならなくな

り、きょうだいのケアを受けながらショートステイを転々としていると聞いて、心配していました。今は、ようやく決まつたグループホームで生活していて、訪ねると笑顔でコーヒーを入れてくれました。また、あや子さん（仮名）とも家族ぐるみで親しくしていましたが、お父さんが亡くなり、グループホームで生活していると聞いていました。訪ねてみると、私が学生時代は一日デパートなどを隅々まで歩いてウインドーショッピングをするのが好きだったあや子さんが、今は、歩行が困難になり、多くの時間を車いすで過ごしていました。お母さんも健康状態が悪くなり、週末に数時間職員と一緒に自宅帰省することを楽しみにしているとのことでした。

（きっとお互いに）四半世紀の年を重ねてきたことを実感しつつも、再会を喜び、落ち着いた生活を送っていることが確認でき、とても安心しました。

「母として」の人生の傍らでの 「置いてけぼり」感

そして、当時から、親しくおつきあいさせてもらつていた何人かの母親には直接、最近の暮らしぶりをきくこともでき

ました。

平田さんは、30代後半の重症心身障害のあるケイタさん（仮名）を育てています。学生時代は、高校生のケイタさんと一緒にたくさんお出かけをしましたが、ケイタさんがいなくとも平田さんとランチやコンサートなどに出かけて、とても楽しい時間を過ごしました。高等部を卒業するときに、家から通える適切な通所施設がなく、家を出すのは早いと迷いつつも当時設立された重症心身障害児施設に息子さんを入所させ、その後は家族会の役員などで活躍しています。ここ数年は、介護などで忙しくされてしまいましたが、相次いで家族を見送り、その後にケイタさんが誤嚥性肺炎を繰り返したことにより、胃ろう造設手術が必要になつたことで落ち込んでいた時期もありました。

ケイタさんが小さかつた頃、夫は仕事がとても忙しく、重度の障害があるわが子の育児になかなか関わることができないことにとまどいもあったのか、帰宅時間が遅く、仕事帰りに気晴らしに立ち寄る本屋に平田さんが迎えに行くこともしばしばあつたとのことです。また夫は学校行事や訓練などに関わる時間をもつことはむずかしく、今振り返つても「記憶

がない」くらい慌ただしい日々のなかで、ワンオペ状態でケイタさんのケアを引き受けました。そして、子どもが施設で暮らすようになった後、夫も早期退職をし、夫婦二人で日帰りや長期の旅行を楽しむようになりました。

以前、その話を聞いたときに私が「お父さんもさみしかつたのかな」と言うと、平田さんは「夫婦の時間は大切だと思うけど、できれば一人の時間がほしい」と言つっていました。また、子どもが入所施設を利用するようになった後、「病院の待合室で過ごした20代」の青春を取り戻すということで、雑誌モデルに挑戦したり、習いごとをしたりと、とてもアクティブに生活しています。

私が、施設で暮らすケイタさんにも会いに行くと、職員に声をかけられると笑顔で応えたり、同じ部屋の人が声を出すと気にかける様子が見られたりと、施設の中に居場所を得て生活していることが伝わってきました。現在、職員体制の都合で、ケイタさんが経口で食事をとるためには、平田さんが食事介助に行かなければならない状況です。「自分が行かな

たなか ともこ／専門は障害者のいる家族に生じる生活問題、障害者福祉援助の専門性。編著に『新・現代障害者福祉論』（法律文化社）、『いっしょにね!! -障がいのある子もない子どもたちも輝くために』（クリエイツかもがわ）など

高齢期を迎えた 障害者と家族

老いる権利の確立をめざして

田中智子
佛教大学



第1回 四半世紀の年月を重ねて